

神の関数

空海
編

まえがき

最近、私が食事の前後に手を合わせるようになったのは空海君のおかげです。彼は去年、善通寺から家にやって来ました。他にもあったが、カワイイ小坊主の方がいいので彼を迷わず選んでしまった。善通寺は空海の父が建立したそうで、敷地内には空海生誕の場所もあるとか。それで勝手に「空海君」と呼んでいます。ときどき、寝っ転がっているのは、三蔵法師や長女がいじめているかららしい。幸福パンダは上野に行ったときに新しい感じがしたので、迷わず連れてきました。空海君となかよくしてます。さて、この空海君、私が高校まで暮らした讃岐の才人なのですが、映画「空海」と原作「沙門空海唐の国にて鬼と宴す」（全4巻）にすっかりはまってしまった私の願いを受けて、近く、「神の関数 -空海編-」に登場します。期待しないで待っててね。Music Scene Research Layer-0 からの宣伝でした。じゃ、空海君、あとはよろしく！

神の関数 空海編

この物語は、映画「空海」とその原作「沙門空海唐の国にて鬼と宴す」（作者 夢枕 獏）にヒントを得て、空海のその後について、筆者が独自に創作した小説である。

序章

暗闇の中で荒れ狂う波に翻弄され、大きく上下しながら、見え隠れする船が一隻、ときおり、その姿が雷雨に照らし出される。これは間違いなく嵐である。当時、船でこの海さえもわたりきることは命を懸けねばならなかった。だが、その僧はまるでおかまいなしに眠り込んでいた。大きな仕事を終えて母国に帰るのである。彼はたくさんの夢を見た。土佐で空と海しか見えない洞窟にこもり、修業をしていたこと、父が建立した讃岐の善通寺で幼少を過ごしたこと、そして、誰かが叫ぶ声、「おまえは唐に渡り、密を持ち帰るのだ。」それは何度もこたました。だが、多くの妖怪や神々と渡り合い、天上界の最高峰まで辿り着いた空海には、もう何もかもが手に取るように解るかのようであった。「これがあの自らを弥勒菩薩と嘯いた妖怪猫の言う”天眼通（てんげんつう）”というものであろうか。空海は夢か現実か判らぬ光景を目の当たりにしながら、さらに深く眠り込んでいった。

天眼通とは仏の持っている六神通（ろくじんずう）のひとつである。遠くのものでも時空を超えて何もかも其処にいながら見通す能力と言われる。無論、そんなもの生身の人間が持てるはずはない。21世紀の今であってもである。だが、最近、少し事情が変わってきたらしい。デジタルの無線通信で映像音声のみならずセンシングした情報さえも現代では津々浦々にまで飛ばすことができる。過去の情報も容易に記録して随時取り出すことができる。しかも最近ではAIとConnectedの発達で何処でも同じ情報を共有し、追体験できる。だが、待てよ。天眼通はそれだけではない。過去の知らない世界で起きたことや、未来の何処かでこれから起こる事象とも通じることができるのである。その意味で予知よりもすごい霊能力といえる。過去や未来とアクティブに会話ができ、さらには其処にいる相手の性向（プロフィール）や周囲状況も同時並行的に複数の時空間領域について感知できる。つまり、もし、何か具体的に情流や人流を誘引できる手立てがあれば、歴史さえも操作できるのである。

夢の中で空海はある一つの視点における光景を見た。今でいう定点カメラ画像のようなものである。そして、そこでは異国というよりは、明らかに違う時代の男が手を合わせているのだ。必ず食事の前後に一度ずつ繰り返しているらしい。俺のことを「くうかいくん」と呼んでいる。横には幸福大熊猫という襷をかけた人形が一体。ということは俺もこのサイズなのか。また、新たな光景が同時に見え隠れした。それは光景というよりは、この天眼通に近い能力を世間一般の人々が手にする歴史的背景のようなものである。だが、まだ、空海ほどの能力には到底及ばないようであった。それらを感知しながら、空海は”突然の揺れ”に集中力を失い、次第にすべては意識から遠のいて行った。

二章 想界

くっくっく。。お前も欲の深い男だのう、空海よ」
聞き覚えのある声がした。。あの楊貴妃の妖猫だ。
「どうだ、俺と同じ天眼通が備わった感覚は？」
「俺は夢でも見てるのか？」隣のパンダを見た
「そうすると、全宇宙のどこにでも通じることができるのか？しかも、そこがひとの心のうちであっても、過去であろうと、未来であろうと」
「まあ、そんな感じだ。いずれわかる。。。
おまえはまだ、密を広めるには試練が必要かもしれぬのう、くっくっく・・・」
そうやって、となりのパンダは再び口を閉ざした。

しばしの静寂を経て、また、別の人物の声が聞こえた。
「導師よ、世の中には、博士の心得みたいなことにこだわる輩が多くて。。
私は何も革命だの梁山泊だのに同意しているわけではなく、その、ごく自然に己の能力を最大限に発揮したいのだ。そういう世の中の仕組みを作りたいだけなのだ。」
空海は思い切って話しかけてみた。「あなたは自らの生きる道に疑問を抱いているのですか？」すると、彼は驚いてあたりを見回し、気のふれたように叫び始めた。「誰だ、お前は？姿の見えないところから声を出して！」どうも、彼には空海の姿はまるで見えないらしい。これでは、いわゆる神の声、仏陀のお告げではないか。だが、気を取り直した彼は、ふたたびすくと立ちあがり、「誰であろうとかまわない、ただの俺の気の迷いだ。」そして、目の前の書物に一心不乱に目を通し始めた。「俺の人生は俺が決める。何人たりとも邪魔はさせない。それでこそ、限られた生のなかで輝く生き方というものだ。人はみないつか死ぬ。何が怖いものなどあろうものか。己はしょせん一人の求道者ではないか。」これは空海も同じ。その場で意識を閉じた。」

次なる人物は、いまから 1000 年は未来であろう時代の若者であった。「よくわかんねーけど、トムクルーズも俺もこういうのが好きなんだよ、きつとしびれるからだをひきずって戦うのが。。インディジョーンズはミッションじゃないからいつでもうまく切り抜ければいいって感じ？あれもすごいね。」どうも幻灯機に登場する役者の話をしているらしい。この時代では自在に思いを映像化して、他人に絵画のように見せることができるらしい。それは決して裕福なものだけではなく、ごく普通の暮らしをする人たちなのだ。そして、この空海が天眼するこのおとこは、自分の生き方を役者に重ねているらしい。それは普通のいきざまではなく、荒れ狂う波を上下する船のようである。そこで手に入れた非日常の体験は時を最大限に有効活用する一方で、心と体を痛めつける生き方で、まさに空海の密を手に入れるまでの道のりとよく似ている。人間とはこのような生き方をせざるを得ない輩がいるからこそ、歴史は新側面が切り開かれていく。一方で、地獄と隣り合わせの日々

でもある。

「あんなもの、若いうちはいいが、年取って得られるものは勲章代わりの学位記くらいのもんだ。マスタでドクターに向かうなら 50 代前までかな。最も必要なことは 2 つ：出世の道具にするか、世界的研究者への道を開くか、それくらいの気構えがないとただの紙切れだ。昔は企業では博士が……」

新しい性向（プロフィール）の声がした。空海にはまだ、その姿が見えない。誰かは分からない。昭和という年号の世界大戦当時のことであるらしい。

讃岐のとある田舎町のため池のほりにある公園である親子が話していた。彼らはいつも自転車でここまで来るのである。

「わしはの一、こっくん。アニキより成績がよかったもんじゃから、大学行かしてもろたんじゃ。わしも兄貴もまちでは最優秀の成績でな一。でもわしのほうがさらによかった。陸軍士官学校へも最年少で入隊したし、終戦で戦地には赴かんかったが一。兄貴も陸軍経理学校を上位で出ての一、毎日新聞の専属記者から地方新聞社の社長になるくらいたいした男やった。最後は不動産会社の社長やったな。わしは東京大学には 1 年もおらんかった。さむ一ての一。体壊したんじゃ。それで、次の年に九州大学に移った。親の仕送りが 1 万円しかの一ての。たまらんから、女学校の教師やって生活しとった。そのときにえらいべっぴんさんが生徒におっての一。それが、おまえの母親っちゅうわけじゃ。」
少年はただ黙ってうなづくばかりであった。

「九大を 2 番で出てからは、あれも、今は教授やっつとるやつに譲ってやったようなもんじやが一、わしは高知に戻って四国電力の就職試験を受けた。文学部英文科じゃったが、戦記の専門科目も全部満点とって、入社試験は主席やった。それからのち、おまえが生まれ、あとは知っての通りじゃ。」

<未完>

三章 密の行方

空海が持ち帰ろうとした密とは何なのか。ここで経緯を要約しておこう。最澄のなしたことは。。空海の位置づけは。。歴史上の未来にある我々にとって何なのか。やろうとしたことは？ そもそも密教とはなんなのか？

それは、**世の情流とやらにどういう効果を与えるのか**。では情流とは何か？その結果、社会はどういう影響があるのか？空海は世のために唐にわたったのか？唐での皇帝の人生はどうであったのか？空海が拝謁したときはただのおいぼれに過ぎなかったのではないのか？それでも空海はそんな邪念をいっさい表に出さず、周りとうまくやって、そして、はては天上界ともわたりあい、己の人生を切り開いたのではないのか？そうである。すべてはこの果てしのない時の流れの片鱗である。無であり、絶大であり、無限なのだ。

ここで登場する天眼通はそれらを、すべての時空を自在につなぎうるものである。あるときは予言であり、想像であり、妄想である。そして、歴史を操る輩の超越人生なのだ。

空海はまた新たな時空のプロファイルと情流を俯瞰した。

：：：：：

かつて巨万の富を手に入れ、多くの成功を納めたジャンピエールはさまざまな非日常を享樂する日々を過ごす。あるとき、街かどにうずくまる少女の

「なぜ？」

という問いかけに端を発してすべてに落胆し、人生に絶望する放浪者となる。セビリアのとある教会で

「誰もときには勝てないですよ」

と放浪者を諭す牧師。。これは彼の人生への答えではない。だが、絶対的制約条件である。**誰も時間軸を操作できないし、そもそもそんな軸など存在しない**。ただ、万物に至る変幻流転こそが「**ときのながれ**」なのだ。そのなかで、人の心の行方など、ちっぽけなものだ。

：：：：：(以下、Wikipedia から引用)

密教は「**文字によらない教え**」である。顕教では經典類の文字によって全ての信者に教えが開かれているが、密教では**大師**が伝授の方法を説く。**密教の教えを得るか否かは本人の情（こころ）しだいであり、誓いを立てて契約し、口に伝えて、心に授けるのみなのである**。瞑想と象徴的な教えを旨とし、それを授かった者以外には示してはならないとされた。**空海（弘法大師）**は、密教が顕教と異なる点を『**弁顕密二教論**』の中で「**密教の三原則**」として以下のように挙げている。

1. **法身説法（法身は、自ら説法している。）**
2. **果分可説（仏道の結果である覚りは、説くことができる。）**
3. **即身成仏（この身このままで、仏となることができる。）**

それまでの仏教が成仏を否定して**阿羅漢**の果を説き、さらには、大乘仏教が無限の時間

を費やすことによる成仏を説くのに対して、密教は老若男女を問わず今世（この世）における成仏である「即身成仏」を説いた。これは、**画期的な仏教の教えとして当時は驚きをもって迎え入れられた。**

中期密教は出家成仏を建前とするのに対して、**後期密教**は**仏智を得ることができれば出家や在家に関係なく成仏する。**

時代が進むにつれてより、簡略化され、要点のみが伝わる非形式化が行われているように見受けられる。これは密教に限る話ではなく、人の関わるあらゆる文化、組織、巧（たくみ）に共通する傾向ではないか。空海はそう予見した。

「ひとは永遠に生きるわけでないからな。無駄な時を過ごすわけには行かぬ。」

そう呟きながら想界の山門に続く道を登って行く。ふと日暮の鳴き声をした。空海は網笠に手をやり、袈裟を翻して振り返る。そして下界を見下ろしながら声を発した。

「では、“無駄”とはいったい何であろうか？」

：：：：また、別の情流時空が現れた。：：：：

鎌倉で竹林に閉じこもり、竹を切る男。何に使うのか。炭を焼くためという。彼はあるとき、建築士から身を転じて、炭焼きになろうと思ったのだ。いつしか自宅には海外から人が訪れるほどの見事な炭の工芸品の数々が並べられていた。だが、決して空間に無駄がない。そして訪れた人と炭火を見ながら、時に饒舌に、時に静かに、そして、時に沈黙する。だが、それらは訪れた人たちを幸せにする“ひととき”である。それだけではない。あの一見無造作な竹林が10年後、20年後、30年後、と将来どうなってほしいかを思い描くのだ。そして、そのために自分は何をすべきなのかなどと考える。訪問者は語る。

「いいですね。こんなに贅沢な時間を過ごせるなんて。。。」

この場所で、彼らは“豊潤なとき”を満喫している。空海は想界からこの光景と炭火を見つめ、安堵した。

「これが“とき”というものだな。。。」

四章 未来点

電脳界は虚映の大源流をさらに拡大させた。空海が念視する机上のマスコットや食卓の男などはその大源流への窓の一つである。未来はすべて、そして、未来かどうかもわからぬ異世界は自在に想念で行き来できた。だが、その大いなる変化点はその半世紀前にあらわれていたのである。

およそ、空海から 1200 年後の世界での出来事らしかった。ある男が、経産省と呼ばれる日本国の組織でこのように進言した。

「天眼通プロジェクトを提案します。」

そして、数枚のプレゼンチャートを手際よく数分で説明した。楕円形状に机が配置された大会議場は沸き返った。それはまるで、その 20 年前の米国の学会での驚嘆を彷彿とさせた。

男は、欧米の情報科学の最高峰にも通じ、アジア圏でも、中国、韓国、インド、シンガポール、タイ、中東ではイスラエルなど 20 世紀から 21 世紀にかけて IT 技術で世界市場に君臨した有名企業や大学を転々とし、すべての世界最高峰を究めてきた。

「私は 10 年前、国内のある事件をきっかけに会社を去ることになり、其の後、学生時代の友人や先輩に支えられ、世界の研究機関を渡り歩く密命を仰せつかりました。」

「君があのと時のプロジェクトリーダーか。知っているよ。確か、『表参道プロジェクト』。。随分不運な目に合ったものだな。多くの知人から同情票は寄せられていたよ。人望も厚かったし、頭脳明晰な男と聞いていた。」

「恐れ入ります。で、話は、端的に申しますと、結論として、“あれ”はある米国の高等研究機関が開発した当時世界最高峰の技術が、誰も知らない経路を介して日本へ流出して、使い方をわきまえない日本のヤンキーが悪用した結果だったようです。まあ、ここで過ぎたことは悔やんでしまっても仕方がないのですが問題は、この 10 年の私の調査結果を集積すると、さらにそれらを超えた超・情報通信予測技術が、2004 年の時点でその背後に存在したということです。それが、釈迦が持っていたといわれる六神通の一つ、天眼通なのです。」

「そして実は、近年、米国でのニューロコンピュータ技術の再燃から市場応用に端を発した第 3 次 AI ブームを中心に自動運転、自然言語処理、第 3 次産業革命 (Factory Automation) などが一気に開花したのは、この天眼通プロジェクトの、ごく初期の成果であるのです。」

「ということは、君がここで提案する以前に同等のプロジェクトが存在したということか。」

<未完>

五章 幸福大熊猫

未来点のマスコットは電腦界のパンダにあった。空海生誕から約 1200 年後に全世界に大流行したこの電腦パンダは中国の MS 社で開発され、幸福大熊猫と呼ばれた。これはまたまたたくまに電腦世界の覇者となった。これらの大半を空海は、いま、1200 年前の時空において、天眼通のセンシングポイントとすることができるのである。空海には様々な光景が見えた。あるものはあまりに熱狂して自動車を運転しながら操作するあまり、事故を起こしてしまった。さらに未来では空飛ぶ自動車で気のふれる者や原因不明の AI 動作不良車さえ現れ、本来事故のないはずの完全自動運転安全飛行車エリアは大混乱を露呈した。

一方で、それらの情流群を自在に操作し、誘引する電腦界の覇者幸福パンダ。この彼とも彼らとも言い難い存在は、天上界よりも強力に、現生の過去未来を超越して時空に現れ、偏在し、空海は大苦戦を強いられることとなった。彼らはいずれ、彼らにとってはすでに遠い過去である、この荒波にただようこの船をも支配下に置くに違いないのだ。「密教などこの国の歴史上に存在しては困るのだ」幸福パンダは天上界の声のように空海にささやいた。彼が唐にわたる以前はおろか、善通寺で幼少を過ごしたころまで影響下に入れて、過激な精神攻撃を受ける空海。戦いは未来時空点と過去時空点の間で壮絶に繰り広げられる。

ある日、空海は讃岐のため池のほとりを歩いていた。すでに唐から帰国して全国行脚ののちにその地には法然院とよぶ大社を建立しようとしていた矢先であった。ある女が髪を振り乱して空海に叫んだ。

「助けてください。わたしは物の怪に殺されてしまいます。娘は大猫に食われてしまいました。息子と命からがらここまで逃げ延びてきたのです。」

空海はまだ未完成の法然院の仮の社に彼女をかくまって、何日か過ごした。物の怪は現れなかった。

「もう大丈夫でしょう。あなたの帰る故郷は？」

彼女は振り向きざまに答えた。

「もう、法然院などつくりませはしないぞ。」

まるで人が変わったように何かにとりつかれた女は、空海に切りかかり、大猫に姿を変えた。

「すべてはお前の妄想だ。民はおまえの味方などしない！」

そう叫びながら、大猫はため池に飛び込んだ。半時もしたであろうか。池の水面に上がってきたのはあの長い髪の女であった。まぎれもなく、その女はとりつかれていたのである。息子は怯えたまま口を閉ざした。空海は諭した。

「母はすまないことをした。だが、お前はこの地に大きな仕事を頼まれてくれぬか。」

そして、讃岐の地に白い営みを増やす計画を空海は語った。それらはやがて、讃岐三白

と呼ばれる、砂糖、綿、塩、ひいてはうどんづくりの源流となった。この雨降らぬ土地に新田開発、治水、灌漑をもたらすもととなるのである。

「密教の教えを得るか否かはきみの情（こころ）にかかれり。ただ、手を握りて印を結んで、誓いを立てて契約し、口に伝えて、心に授けるのみ。」

空海はそれを自ら実践したのである。

<未完>

第六章 密の使命

「空海よ、この霊界での戦いの最重要使命は『密を持ち帰ること』である」

また、なにものかの声がした。

「了解致した。」そう答えざるを得なかった。

「おまえが戦いに入る前に、会得すべき境地を教えておこう。それは、“超個人”と呼ばれる。1200年後には、一般人にも浸透し始める超越思想、やがて科学と呼ばれる学問は自らの体系に終止符を打ち、より広く宇宙全般を“心”でとらえることになろう。」

確かに、このような“予想”は歴史上の随所に萌芽が見られ、アジア圏のみならずあるときは欧米の空想科学小説にも登場した。いわば、人類の向かうべき、必然的方向とでもいうものか。だが、多くの犠牲が必要であった。

空海は手を合わせ、導師の声のする方向をみあげた。

「よろしくお頼み申しあげます。」

「そして、人の組織や個体差などは無に帰するのだ。だが、それを前面に押しやると人本来の競争心やいきがいといったものがなくなり、やがて破綻する。そこで、だいじなことはな。。。」

空海はおよそ小一時間ほどの時空の旅と想念体験を見せられ、おおよそを理解した。実際の時間はほんの一瞬であった。

「あとはお前の実体験の積み重ねしだいだ。」

そういつて導師は虚空に消えていった。

。。。。

空海は天眼通と引き換えに超越個人の才を宿した。然したる戦闘能力ではないが、それは恐るべき才であった。それは、これからの空海の使命に必要なものであった。もはや外の時空での才知は一切無用なのだ。進むべき道はすでに“定まって”いた。だが、その前に降りかかる悪霊を退治せねばならぬ。

。。。。。

「やつは水だ。」

幸福パンダの分身 A はすれちがいざまに部下に囁いた。空海は古くから日本に伝わる廁の妖怪を退散させる呪文を唱えた。

「かんばりにゆうどうかつこう」

途端に分身 A とその一味は煙のように消えてなくなった。だが、すぐさま分身 B が現れた。幸福パンダの組織力は絶妙で隙がない。なにしろ、すべてがつながっているのだから。そしてもう一つの強力な要素は“策略”である。その多くは戦国時代の武将に学ぶもので、それが 1200 年後も生かされているのである。だが、幸福パンダには道徳や武士の誇りたるものはかけらもなかった。支配のためには手段を選ばないのである。いたるところに偏在する時空影に身を潜め、プライバシーを荒らし、連絡を取り合う魑魅魍魎の輩がその実態

であった。決して人前には姿を現さず、糸電話のような声で相手に囁くのだ。だが、空海の超越個人の才はこれに対して万全であった。まったく取り乱さず、的確かつ最小の言葉で彼らを攻撃した。

「密教の教えを得るか否かはきみの情（こころ）にかかれり。ただ、手を握りて印を結んで、誓いを立てて契約し、口に伝えて、心に授けるのみ。」

空海はそれを武器に変えた。

。。。。

やがて多くの死霊が霊界に散り去り、<未完>

消え去った。

「まだ、このままではすまないぞ。。。」

幸福パンダの本体はまた、いずこかへと行方をくらました。それは未来であるのか過去であるのか、倭国であるのか新大陸であるのかもわからない。いずれにしても空海はこの場をわずかに勝利した。

<未完>

終章

晴れ渡る朝、船は無事、倭国備前にたどり着いた。なにごともしなかったかのような。かくして乱立して見え隠れした多くの未来点の一つの枝に刈り落とされ、他の時空では他の未来点だけが残る。過去も同じ。時は戻りはしないのだ。それでもいつの時代も自由な選択意思は残る。別の過去には旅することができても、本当の過去にはもどらない。そもそも、本当の過去とはなんなの？ 文書や遺跡の上だけに存在するものではないのか？ では本当とは？ 完全なる真実とは？ そんなものありはしない。歴史上の人物の一言一句一情念をすべて残したものなど存在しない。大半は多くの集合知の上に成り立つ想念なのだ。

「さあ、広めねば・・・」空海は倭国の地をしっかりと踏みしめ、再び長い道を歩き始めた。

：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「よし、あさめし準備完了！、あ、くうかいくん、また、転んでる。三蔵法師（妻のこと）がまたいじめたな。」

旦那は空海をちゃんと立たせて、手を合わせ、何時もの朝食に取り掛かる。

「最近、声聞こえないなあ、彼らの声。。。」

そばで幸福パンダが依然として異なる方向を向いてすわっていた。

あとがき

<予告編>

：：：：

MM2 のミュージカルの完成度の高さを見て、NHK の朝ドラでもそうですが、たった 1 回のためにすさまじい練習があったのだらうなあと思います。たとえば、帽子がどこまでどんな風に飛んだかとか、イントロの入り方とか、役者も凄いですよね。昨日の朝の永野さん、ちょっと東京系のお洒落な別人というか、役者はその役柄を超えたハイパーな面があります。トムクルーズも大好きですが、プロの凄さを気にしながら映画を楽しむと、いろいろ学ぶことも多いです。AI ではこんなことできないんです。

：：：：

<http://penguin-highway.com/>

：：：：

あ、そう？

時代は変わったねー

へーえ

うちのと同期、また、話でもしようよ

：：：：

その後、特にそういう機会もなく「ある日」訃報が

Bamboo はもういないらしい。「100まで生きるぞ、俺は。」

とってたやつが。。

：：：：

夢の中に登場する、想界の謎の人物、一三一彩湖

「私は。。。である。そんなへまはしない」

：：：：

明らかに常人を超える能力を持つ彩湖

そして時空（とき）を超える美艶才女瑠璃、顔の見えない瑠璃子、

「私と瑠璃子は時として一体なの」

：：：：

「お前の郷里には何が待っているのだ」

：：：：

善通寺、そして、法念院、湖にまつわる伝説

：：：：

「これは電脳と呼ばれる」瞬時にして二億六千万回の x x x を言い当てることができる。

「みらいとはこんなものなのか」

：：：：

「芸能に秀ずる者恐るべし」

人格を計算して自在に演出することができる。

：：：：

密が危機に

それをさまたげる一派

みつとはなにか

：：：：

300年後の善通寺、「彩湖よ、俺はお前を見た気がする、讃岐で」

善通寺、今や、空海生誕の地は受験界神頼みの登竜門であった。

：：：：

そのために天元力を駆使する空海

彩湖は欧州界故編に旅立った。

「時空のどこにいてもおなじこと。。」

「すべては気で統一される。。。」

：：：：：

「忌み嫌うべきものは“気”の秩序を乱す魑魅魍魎どもの邪念と叫びである。」

「始皇帝の作ったといわれる、主訴による大結界と同様だな。」 p.256

「そこまで大規模ではないと思うが。」

輪にたどり着いたころにはもとにもどっていた

：：：：：：

新時代の幕開けを感じさせる何かが起きている。

：：：：：：

「ですが、音楽効果は私の時代にすでにありますよ。」

空海は月琴で天にも昇るような光景の演奏を楽しんだことを思い出した。

：：：：：

<次回ドラフト乞うご期待！>